

昔話を聴きました

6月16日（火）9時10分から、昔話の語り手の門間クラさんをお迎えして、昔話を聴きました。今年度は、全部で4回予定していますが、今日はその第1回目です。今日のお話は、「天福地福」というお話です。（ざっと、こんなお話でした。）さて、始まり始まり。（門間さんは、福島弁でお話しています。）

昔々、貧乏なお家があって、そこには父ちゃんと母ちゃん、わらし（子ども）がいっぱいいて、暮らしがとっても大変でした。朝から晩まで家の仕事をして、それが終わるとほかの家の仕事を手伝い、いくらかの銭をもらっていました。わらしにうまいものを食わせてえと、いつも思っていました。

神社のお祭りの季節になりました。

わらしは、

「父ちゃん、お祭りに行きたいよ。」とせがみました。

父ちゃんは、

「銭がかかるから、だめだ！」

と言っていました。わらしのためにお賽銭の銭だけをもってお祭りに出かけることにしました。たくさんの屋台が並ぶ通りを過ぎようとしたとき、

「そこの父ちゃん、そこの父ちゃん。」

と呼び止める声がしました。占い師の声でした。

「なんだか、ずいぶんいい運勢が見えるぞ。銭はいんねえから、手を見せてみい。」

「確かにいい運だ。地運は悪いが、天運はいい。おい！父ちゃん。地運はだめだけど、天運はいいぞ。忘れるでねえぞ。」

と、占い師が何度も言いました。

「何が地運は悪いが、天運はいいだと。おれらは、ずっと貧乏でねえか。」

そう言って、父ちゃんとわらしたちは、家に帰りました。

その後も、毎日毎日、ずっと働き通しでした。

半年くらいたったある日、用足しのため近道の竹藪の中を通りました。しばらく歩くと、何やら光るものを見つけました。近づいてのぞいてみると、それは何と、かめに入った金貨でした。目を開けることができないくらいに、きらきらと光り輝いていました。

「拾って帰って、これでわらしらにうまいものを食わせてやりてえな。」

と、父ちゃんが思ったとき、占い師の言葉が頭に浮かびました。

「そうだ、これは地運だ。地運は、悪いんだった。」

父ちゃんは、金貨を拾わずに帰りました。

「おっかあ。・・・・・・」

と、父ちゃんはこれまでの出来事を話しました。

「あら、父ちゃんよがったね。金貨をもって帰ってきたら、泥棒になっちゃうところだったよ。よがった。よがった。」

その話を壁の向こうで聞いていた隣の家のばあさまが、

「じいさま。竹藪の中にかめに入った金貨があるそうだ。じいさま。拾ってこらんしょ。

隣の父ちゃんは、馬鹿だな。この金があれば、うまいもの食えたのに。」

じいさまとばあさまが、拾ってきた金貨を数えていると、金色が銀色に、銀色が銅の色に、そして最後には石になってしまいました。

「隣のおやじに馬鹿にされた。」

怒ったじいさまは石をざるにあけて、家の煙だし（屋根からいろいろの煙を外に出すところ）から石を家の中に放り込みました。

「父ちゃん。上から光るものが落ちてくるよ。金貨だよ。これは天運だから、もらってもいい物だよ。」

「そうだな。でも、これは天からの預かり物だ。今までと同じ生活をしなくてはな。」

と、雨漏りを直した残りのお金を、近所の困った人に分け与えました。これはたいした人だということで、後々立派な人になったそうです。

みんなのやっていることは、天から見ているので、いいことをしていかななくてはならないよ。おしまい。

